

## 平成22年度 水産試験場目標

目標	目標設定の理由	平成22年度の目標値	到達すべき目標値	平成22年度の目標達成に向けての手段・方策
琵琶湖水産資源の回復	<p>琵琶湖の水産資源は漁場環境の悪化や外来魚の異常繁殖等により減少しています。これら魚介類の回復を図るため、生産基盤である漁場環境の保全や繁殖・成育場所の造成、外来魚を駆除するための技術の開発、重要な水産資源の種苗生産放流技術の改良を図っていく必要があります。また、安全安心な水産物を供給していくためには魚病対策や養殖技術の改善が必要です。さらに、地球温暖化に伴い水温上昇がもたらす影響評価を進める必要があります。</p>	<p>資源回復と漁場の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農業排水影響評価、漁網汚損状況の把握と汚損原因の解明、魚介類による生態系保全機能の評価、南湖水草帯での底質の状態把握 4件</li> <li>・ 外来魚のより効果的な親魚捕獲技術開発、在来魚介類回復状況の把握 2件</li> <li>・ 種苗生産放流技術、繁殖・成育場造成技術の改良・開発 4件</li> <li>・ 冷水病に強いアユの養成技術、ピワマス3倍体量産養殖化技術と飼育特性の解明 2件</li> <li>・ 水温上昇がイサザ・セタシジミに及ぼす影響評価</li> </ul>	<p>漁場生産力の評価と向上のための技術開発と提言 H22 延べ8件</p> <p>外来魚のより効果的な駆除方法の開発と駆除効果の評価 H22 延べ6件</p> <p>在来魚介類の繁殖・成育場の造成改良技術と種苗生産放流技術の実証的開発 H22 延べ10件</p> <p>より良い水産物を提供するための技術の改良、開発 H22 延べ6件</p> <p>温暖化に伴う影響の解明 H22 延べ5件</p>	<p>宇曽川の濁水流出状況調査。漁網への付着物増加速度の測定と汚損物質が付着する物理化学的条件、栄養塩バランスの変化と植物プランクトン群集構造の変化の関係を解析。魚介類による付着物や水草摂餌量の測定。南湖水草帯での底質調査の実施。</p> <p>カイト式オッターの強度を向上させ、トロール網の大型化と水草混入対策により、より効果的な捕獲漁具を開発。在来魚介類の回復状況について、曽根沼をモデル水域として調査を実施。</p> <p>水田を利用したニゴロブナの効率的養成技術およびホンモロコ、ゲンゴロウブナの種苗生産技術開発。セタシジミについては給餌飼育を併用することによる稚貝の大量生産に向けた技術を開発。</p> <p>これまでに開発した「抗病性付与技術」の養殖現場での活用実態を把握し、抗病性付与状況を評価。ピワマスは全雌三倍体作出率を高めるための処理技術を改良。</p> <p>イサザについては、影響評価をさらに進めるとともに、その評価結果に対応した資源安定化技術の開発を進める。セタシジミについては、生息漁場の水温把握や肥満度を指標とした水域間比較等による良好な生息環境を検討する。</p>